

〈voilà＋名詞句＋関係節〉構文をめぐって

－先行場面とスキーマ化されたシナリオ－

津田 洋子
(京都大学大学院)

〈voilà＋名詞句＋関係節〉構文には、話し手の目の前で起こった出来事に聞き手の注意を向けさせようとする(1)のようなタイプの文がある。

- (1) a. C'est bien. Ah, voilà le feu qui flambe.
b. Arrête, mais arrête ! ça y est ! voilà mes plaques qui recommencent !

この文タイプは、「発話状況への注意喚起 (Rothenberg 1971)」、「聞き手に直接知覚可能 (Lambrecht 2000)」など、直示性の観点から説明されることが多かった。一方、voilà は空間的直示機能だけでなくアスペクトマーカ―としての機能を持つことも指摘されてきた (Lafontaine 1989, Léard 1992)。これらの先行研究をふまえて、津田(2013)では、il y a 構文との比較から、話し手の目の前で起こった同じ出来事を表現しながらも、voilà 構文には先行場面が存在するという仮説を提示した。

本発表では、この先行場面との関係性にもとづく、話し手の目の前で起こった出来事の予測可能性について考察する。そして、出来事を表わす〈voilà＋名詞句＋関係節〉構文が定名詞句と共起しやすいことを示した上で、定名詞句の場合には、時系列上にスキーマ化された出来事のシナリオの存在により、先行場面から予測可能な出来事を表わすことを説明する。

また、〈voilà que 節〉との対比においては、出来事の中核的参与者である名詞句の指示対象が出来事の予測に組み込まれているかどうか、両構文の意味の違いとなることを説明する。